



岡山県津山市椿高下
津山高専 図書部
TEL 22-2204
津山朝日印刷町
TEL 22-3135

図書部の おすすめ本 in 書庫



皆さん、津山高専図書館の書庫を覗いたことがありますか？
書庫にも素敵な本があります。
今回は図書部員が書庫に眠る本を紹介しましょう！

新釈美作太平記

三好基之

皆さんは自分の住んでいる所にかついでいた戦国時代の武士達のことをご存知でしょうか。戦国時代と聞くと、織田信長等の有名な人を連想しがちですが、ここ美作にも武士道を貫いた侍達が確かにいました。ただし、本書には、有名な人はほとんど出てきません。しかし、領地を守り、主家に忠勤し、主のために必死に戦った人々の姿が描かれています。例としてあげると、本書には「平田無二」という武士が登場します。この人は何を隠そう天下の剣家・宮元武蔵の父親です。子と同様、武術に秀で、家中に二人といない槍の名人として「無二」と名付けられたと記

怪談

LAFCADIO HEARN

訳：田代三千穂

されています。さて、私事ですが、本書を読んで初めて自分の住む地区に城館があったことを知りました。本書を読むともしかしたら貴方も自分と縁のある城や武将を見つけることができるかもしれません。

この本は13編からなる怪談話をまとめたもので、一つ一つの話にそれぞれ違った魅力があり、引き込まれていきます。そして一番の特徴といえば、英文、訳文が両方のもつており、つまり、難しい単語の訳し方がわかるということです。「英語の文に興味を持ってない」や「英語の文は難しそうだ」という人にも、一つ一つの作品が比較的短いので、気軽に読み始めることができます。私の中でも一番面白いと思った作品は、「乳母桜」です。この話は怪談としての怖さもやはりありますが、乳母の行動に心を打たれる、短くても泣けるような作品になっています。

JJJN

夏目漱石

皆さんは文豪・夏目漱石の「こころ」を読んだことはありませんか？いつも人を寄せ付けない雰囲気を感じ

数ページで完結するので、本を読むのが苦手なそのあなたでも読み進めることができます。本が苦手な僕でも内容に入り込んであっという間に読みました。ぜひ読んでみてください。

鼻

芥川龍之介

この話がよく知られた芥川龍之介が書いた話で、主人公は禪智内供という僧侶となっています。この僧侶は特徴的な鼻を持っていました。そのことからからかわれていました。ある日、禪智内供は鼻を短くすることに成功するのですが、鼻が短くなくても逆にそのことでからかわれてしまうようになります。鼻が短くなれば笑われることはなくなると思っていたのとは裏腹に話は進んでいきます。人は他人の幸福をねたみ、他人の不幸を笑うという人間の心理がよく表現されている物語です。

雪国

川端康成

私がこの本を選んだ理由は本の紹介に書かれていた「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」というフレーズに興味をひかれたからでした。この一文が物語のはじめに書かれています。

内容は、東京で妻子とともに暮らす島村という男がいました。島村は時折トンネルの向こう側の雪国へ行き、芸者、駒子と過ごしていました。美しい情景描写や比喩表現に引き込まれ、読み終るともう一度読みたくなるような作品です。みなさん、どこか幻想的な「雪国」の世界に入り込んでみてはいかがでしょうか。

棒になった男

安部公房

この戯曲は「靴」「時の崖」「棒になった男」の3つで構成されるオムニバス形式の演目です。戯曲というものを読んだことがない人も多いと思いますが、舞台で演じるための脚本のように書かれた作品のことです。オムニバスとは、異なる複数作品で1つのストーリーを作ることで、ですから、この3つの作品にはそれぞれの主人公が登場し、直接的な内容の関係はありません。

そして、この3つの物語はそれぞれ人間の誕生、過程、死を表しています。

「棒になった男」は死を表していますが、何より印象的なのは棒になった(死んだ)男に対する同情や憐憫が一切無いことです。むしろ突き放しています。その男を品評する2人の人物が描かれるのですが、片や棒のように無能、片や棒のように酷使され続けた、などと男の人生をつまらないうたの棒だと言いました。後者は男を擁護しているように見えなくもないが結局は棒だと言っているのです。そして、最後にその2人は顧客の方を指さしてこう言います。「あなたは一人ではない。見たまえ、君を取り巻くこの棒の森。あんなに沢山のお友だち、棒になった男たち！」この3つの物語が何を意味しているのかは自身で考えてみてください。彼の作品にはいろいろなところに暗示がちりばめられている。ゆっくりと探していくのも面白い。

現代文の教科書に「赤い繭」が載っているのをご存知ですか？いいのではないだろうか。

啄木歌集

久保田正文

この本は石川啄木の作った歌を集めた本です。

啄木といえば「東海の小島の磯の白砂にわれ泣き濡れて蟹とたはむる」という歌で有名です。

聞いたことがある人も少なくないと思います。この貧困を嘆く歌のように、この歌集には啄木が自分の心情を書いた歌が多く収録されており、短歌としては珍しく句読点やびっく

りマークなどが使われている歌もあります。

啄木が自身の感情を表現するために、あえてそういった特殊な形で書いているのだと思います。

また、情景をそのまま書いたような歌も多くあり、読みやすくなっています。難しい解釈を抜きにしても読め、短歌集という形をとっているので今まで短歌に接してこなかった人も読んでみる価値があると思います。

読書感想文紹介

美作地区 高校生

読後感想文コンクール

佳作作品

戦後七十年の今、

考える事

「永遠の0」を読んで

岡山県立津山高等学校

一年 下山 未来

受験戦争真っ只中だった昨年の秋。私はある一冊の本を読み、学校と塾しかない機械的な日々が一気に色あざやかに見えはじめました。私の世

界に色をとり戻してくれた本。それが、百田尚樹さんが書いた「永遠のゼロ」でした。もしこの作品を読んていなければ、私の世界は今も色あせたままだったかもしれせん。この小説の面白い所。それは、主人公の健太郎とその姉・慶子の考えが最後の最後まで大きく変化する所だと思ひます。二人は実の祖父・宮部久蔵について調べはじめ、だんだんと祖父の人物像が分かるにつれ、健太郎は自分の夢、慶子は結婚に關す

る悩みに自分なりの答えを出し、すべては丸くおさまるはずでした。しかし、大西という男から祖父の話を聞いた時、二人は衝撃の事実を知つてしまひます。二人は驚きながらも、自由と豊かさであふれる現代を、自分の気持ちを強くもつて生きようと心に決めて物語は終わりを迎えます。私も読み終えた後、少し考え方が変わりました。平和とはこんなにもあたり前に味わつてよいのか。私はまだ、戦争のことを知らなすぎるのではないかと、様々な事を考えました。自分の中で結論を出すには、まだはやかつたのだと思ひます。しかし、読み終えた時点で確実に、私の世界は以前よりも輝いて見えました。特に心に響いたのは、物語のクライマックスで慶子が発した、「大好きな人と結婚しないと、おじいちゃんに怒られちゃうわ。」という言葉でした。それは、慶子が祖父の家族への愛と今という平和な時を生きていく喜びをかみしめたからこそ出た言葉なのだと思います。この後、慶子は金も地位もある婚約予定だった人を振り、本当に愛する人のもとへ会いに行きました。私自身もこの平和な世界で友を、異性を、家族を愛せる喜びを改めて深く感じる事ができました。

私自身も、戦争について調べている時に何を信じればよいのか不安でした。そんな時、私は必ず中学での社会科の先生が常にかけていた「情報」をうのみにしてはいけない。自分でよく考え、自分の意見を持つべきだ。」という言葉思い出しました。この言葉のおかげで、情報を自分の中でうまく整理することができました。この経験から、私も教師になりたいと決意しました。私にこの言葉を送つてくれた中学の先生のように、私も子供達に「自分の考え」を持つことの大切さを伝えたいです。そして、戦争体験の生の声を聞くことができた私達の世代が、後世に「戦争とはどれだけ恐ろしいものか。」を伝える役割になつており、その責務は必ずはたさなければならぬ、私達の世代に課された役割なのだと強く思ひました。

『きみの友だち』

を読んで

岡山県立津山高等学校

一年 福嶋 藍

「友だち百人できるかな。」小さい頃によく歌つた曲だ。今の時代ではSNSなどで百人なんてすぐできてしまう。でもそれは友だちなのだろうか。この本を読み始めたとき、そう思った。

校してからも本当の自分を出せないで苦しんでいる西村さん。親友が中学生になつて遠く離れた存在になつてしまふ三好くん。ライバルであり親友であったブンに何でも自分を超越されることへの嫉妬をするモトくん。年齢や立場は様々だが、その一人ひとりが友だちについての悩みを抱えている。

この話の中で私が一番興味をもつた主人公は堀田ちゃんだった。なぜなら自分どこか似ている部分があると感じたからだ。堀田ちゃんは自分の意見をはっきり言えず、友だちに合わせさせてしまふ。相手と意見が違ふことが怖いのだ。それは一人になるのが嫌だからだ。私も彼女と同じように一人になるのは嫌だと思ふ。色々な人に好かれたいし、その為だつたら自分に嘘をついてでも友だちに合わせたいと思ふ。でも時々、友だちと一緒にいても、楽しくないと思つたり疲れたりする。それは自分の意見をちゃんと伝えていないからだろう。そしてその度に友だちに合わせるのがよいか、はつきり意見を言えばよいか迷つてしまふ。堀田ちゃんはクラスの人気者だったがクラスのどのグループにも入らずにどの子にも毎日声をかけた。その子に合った話をして楽しませた。だがいつも心の中では、ちゃんと話を合わせられたらどうかという不安でいっぱいだった。ある日グループ内で喧嘩が起り、仲を取りもとうとした堀田ちゃんだったが、逆に堀田ち

やんがはじめられてしまった。グループの一人の子が、「あんたってカメレオンじゃん。周りに合わせるじゃん。そういう子って信用できないんだよね。」と言った。自分に言われているような気がしてたまらなかった。堀田ちゃんも、ただみんなが楽しい状態が好きだっただけなのに。

私はこの本を読んで自分のことを改めて考えた。学生ときはやっぱり「みんな」を意識してしまう。誰からも好かれたいし、なるべく自分をよく見せたいとも思う。いじめに遭いたくないから愛想良くして、時には相手に合わせた話や行動をしてしまう。そんな中では「本当の友だち」を見つめることはできないだろう。変わらなければならぬ。堀田ちゃんも自分にとって大切なことは自分らしくいることだと気付く。これからのグループにも入らずみんなを楽しませてください。それが一番自分らしいと思つたのではないだろうか。

私もこれからは「本当の友だち」を見つめるために、少しずつ自分の意見を言えるようにしていきたい。

夏に知った「繋がり」の大切さ

岡山県立津山高等学校

二年 尾原 菜緒

「家族」それは世界中の誰もが生

まれた瞬間に所属する社会集団であり、友達や先生とは違った、大切で、またとない特別な存在であると私だけで多く多くの人が感じていると思う。そして、家族が大好きだと思ふ。その家族の温かさ、大切さ、繋がり、友達の強さに改めて気づかされたのがこの本「星やどりの声」である。この夏出会ったこの本に私は一目惚れをした。

私は小学生から現在に至るまでバレーボールをしている。二人の妹もバレー部に入り、三人そろって休みという休みはすべてバレーをしていて、部活動が中心の日々を送っていた。そんな中でも両親は遠征時の車出しや応援を欠かさずに、協力してくれていた。

しかし、私達の学年が上がるにつれて、学校がそれぞれ分かれ、家族がバラバラになることが多かった。私が高校生になると尚更で、部活動だけでなく、どこかに遊びに行くのも皆がそろうことが少なくなってしまう。

高校二年生になった私は友達と将来のことについて話すことが多くなつた。行きたい大学、就きたい職業について話すうちに、ふと県外に出てしまうと今のように毎日会えなくなってしまうという当たり前のことに気づいた。そして今になって「もつと家族と過ごす時間があつても良かったのではないか。」と思ひ、少し後悔して悲しい気持ちに沈んでいた時に出会つたのがこの本だった。

この本の紹介文に「家族が独り立ちする」というワードがある。これが私の心に入ってきた時、先程の悩みがすつと解けていく感じがした。どういつても最後に力になってくれたのは家族の存在で、それを言葉にしながらも繋がり合える。その繋がりがあるから、離れて独り立ちしても大丈夫なのだ。

時には大切な人だからこそ言えない悩み、不満や不安を抱え苦しむ私のように後悔し悲しみを感じた人もいると思うが、そういう人にこの本を読んでほしい。この本の「誰もね、自分でわざわざ悩みを作つたりなんかしない。皆色々なことに悩んで、それでも生きていくの。」という言葉が私の心に印象強く残っている。今までも、そしてこれからもやるせなくて、どうしようもないと思つてしまうことがあると思う。しかしそんな時、自分だけが辛い状況にいますかと思つてはいけません。どこかの誰か、自分のようにもがき苦しんでいる。そう思うと少し気持ちも軽くなるのではないかと。そして、その思いに気づき涙み取つてくれる人がいるだけでも幸せなことなのだと思います。

これから先も、家族はもろろんのこと、人との繋がりを大切にし、この本のような温かい人間関係を持ちそれをひろめていくことを目標に生きていこうと思ふ。

『永遠の0』を読んで

岡山県立津山高等学校

二年 芳賀 灼音

当時祖母は一歳だった。四歳だった祖父もほとんど記憶がないという。一九四五年八月十五日、日本が敗戦を認めた日である。あれから七十年という月日が過ぎ、七十年前の日本の様子を鮮明に覚え、語れる人は多くはない。直接の体験をしていない者にとっては、戦争の惨状を写真や映像を通して考え、感じるしか戦争への憎悪を学べなくなる。高齢化によって当時生きていた人たちの声は減少している。

今年には戦後七十年という節目の年で新聞やテレビ等のメディアは戦争のことを多くとりあげている。毎日、新聞を広げると「戦争と今」とか「当時の思い」とかというタイトルで被爆者が被爆体験を語っている。インターネットでも様々な特集が発信されている。特に印象深かったのは零戦パイロットの遺書がまとめてあるものだった。

「人は一度は死するもの、悠久の大義に生きる栄光の日は今を残してありませぬ。父母上様もこの私の為に喜んで下さい。」

「お母さんと呼ばざりし俺幾度か思ひ切つて呼ばんとしたが何と意志薄弱な俺だったろう母上お許し下さい。さぞ淋しかったでしょう。今こそ大声で呼ばして頂きます。お母さん、

お母さん、お母さん。」

二つの遺書は対照的であった。自分が死ぬことをきっぱり決めた前者と母との別れに嘆き悲しむ後者では大きく違うように思える。しかし、両者とも家族の存在は共通である。守つていきたい両親より先に自分が死ぬことの方が同じではないだろうかと思う。もし戦争がなければ特攻隊員は「生きる」という手段を捨て、自分から身を投げ出すことはしなかっただろう。戦時中の日本の雰囲気や隊員に闘争心と忠誠心を押しつけたのだった。

機体が空中で露わになり、逃げも隠れも出来ない状況下で、隊員たちはどれだけ自分の命の貴さを認識出来ていたのだろうか。戦争はそんなことを考える心までも奪つてしまつたのだろうか。

先日、戦争映画の撮影を終えた女優がある言葉を語つた。その言葉は強く私の胸に迫るものがあつた。戦後とときと一瞬キツとするが、もう二度と戦争をしないと堅い約束も含まれている。唯一の被爆国であるからこそ学べる平和の貴さ、命の貴さを後世に伝えることが出来るのは私たち自身なのである。島国であるゆえに意識されにくいのが、現在も様々な地域で紛争が起きている。戦争体験者の声に耳をかたむけ、未来へ平和をつなぐバトンはもう私たちにも渡り始めている。その使命を果たすためにも私はこの言葉を忘れたい。

「戦後がすつと続くといひですね。」

日本の文豪の名言

夏目漱石

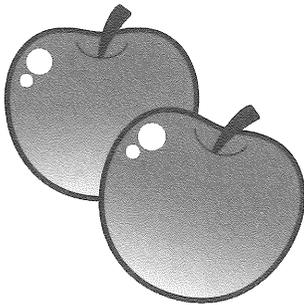
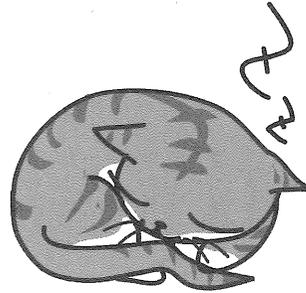
牛になることはどうしても必要です。

夏目漱石が芥川龍之介、久米正雄に宛てた書簡。牛のように超然と、あせらず根気よく作家の修行に励むように説いた一節です。

これだけでは意味がわからないと思いますが、全文を読むととてもいい言葉だとわかるので興味のある人はぜひ調べてみてください。

※久米正雄(1891~1952)

日本の小説家、劇作家、俳人。夏目の門人だった。



芥川龍之介

人生は一箱のマッチ箱に似ている。
重大に扱ふにはばかばかしい。
重大に扱はなければ危険である。

人生は深刻に考え過ぎても思い通りにならないが、だからといって全く考えないというのもとりかえしのつかないことに繋がったりします。

つまり、何事もそこそこがいいということです。

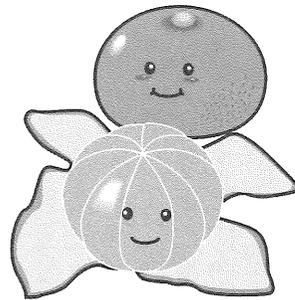
島崎藤村

生命は力なり、力は声なり、声は言葉なり、
新しき言葉はすなわち新しき生涯なり。

『藤村詩集』の序文の一節。

「遂に新しき詩歌の時は来りぬ」という格調高い文に始まり、新しい文学を開くことこそ若人の使命であると宣言しています。

新しい詩歌の時代の到来を告げる若々しい高揚した宣言です。



図書部の粋を集めたライブラリーが今年も完成しました。今年是一年生が二人のみで、一年生の担当ページは大変そうだが、思っていましたが見事な構成で感服しています。二年生もそれぞれ自分の選りすぐりの本をユニークに紹介してくれました。

今回のライブラリーを讀んでもらって、少しでも本に興味を持っていただけたら幸いです。

最後まで読んでくださり、有難うございます。



第61回青少年
読書感想文
岡山県コンクール

佳作・1年 光岡 海音
2年 安田 早希
2年 谷口奈々香